

HOME > PROJECT > XSTUDIO >
非合理を選ぶ、合理性もある。地域をこえたプロジェクトから見えてきたこと ～XSTUDIO 東京プレゼンテーション／ラウンドトーク～

PROJECT XSTUDIO

非合理を選ぶ、合理性もある。 地域をこえたプロジェクトから 見えてきたこと ～XSTUDIO 東京プレゼンテーション／ラウ ンドトーク～

2019年1月27日（日）、東京ミッドタウン日比谷 BASEQで開催したXSTUDIO 東京プレゼンテーションは、メンバーや関係者を含めて200人以上が一堂に会す大盛況となりました！

XSTUDIOでは、約120日間、「繊維」をフィールドにスタジオメンバーたちがプロジェクトを生み出してきました。当日行われたラウンドトークでは、ゲストレビュアーの白水高広さん、若林恵さん、伊藤亜紗さん、そしてXSTUDIOのスタジオリーダー萩原俊矢さん、ローカルリーダーの新山直広さん、坂田守史さんが登壇。これからの地域との関わり方を問う、示唆に富んだトークの模様をお届けします。

PROJECT



XSESSIONS

2021 PROJECT
ARCHIVE

2020 PROJECT
ARCHIVE

2019 PROJECT
ARCHIVE

2018 PROJECT
ARCHIVE

2017 PROJECT
ARCHIVES

2016 PROJECT
ARCHIVES

CONTACT



司会：STUDIO A・B・Cのプレゼンテーションはいかがでしたか？

白水：産地と異業種の人たちとの出会いのきっかけや、それがどのように持続可能な活動になっていくのかに、興味を持ちました。たとえば、今回考えたアイデアからロイヤリティを得るなど、今後自分たちのアイデアを換金していく仕組みを考えると面白そうです。

今日、ここにこんなにも多くの人が集まっているのは、新しくチャレンジしたい人が多いことの表れ。福井で起きてることを、ほかの地方でもつくりだせるようにしたいと思いました。



▲九州のものづくりを発信している株式会うなぎの寝床 代表取締役の白水高広さん。東京プレゼンテーションでは、STUDIO Aのパラレル

セッションにご参加いただきました

若林：STUDIO Bでは「福井らしさ」の話が出ていましたが、福井と何の縁もない私からすると、みんなの熱意や福井をなんとかしたいという話は、いくら言われたところで、評価の対象にはならないんです。私はメディアの人間なので、例えばプロダクトに強度があるとか、価値があるものだと思えないと取り上げません。まずは価値があるものを追求することが大切。福井らしさは後からついてくるのではないかと話しました。



▲編集者で黒鳥社（blkswm publishers）代表の若林恵さんは、テクノロジーや文化、コミュニティなどあらゆる分野に精通。STUDIO Bのセッションでは鋭くもあたたかいコメントをいただきました

伊藤：STUDIO Cは、全体像をあえて把握せず、手をのばして探索する「アメーバ」のような性質を持ったグループ。問題解決をするデザイン的な考え方ではなく、逆に問題に出会ってってしまう、アートの感じ。打率は高くないかもしれないけど、ぶっ飛んだものがふいに生まれる。言葉をあえて遠ざけることがいいなと思いました。

以前、視覚障がいのある方とスポーツを観戦する方法を探る研究会で、布を取り入れたことがありました。従来、目が見えない人には言葉で実況中継するのが一般的ですが、その競技の質感は伝えられない。そこで、柔道の試合では、選手の動きに合わせてスタッフ二人が手ぬぐいの両端を引っ張り合い、見えない人にその真ん中をさわって

もらったんです。ものすごくローテクですが（笑）、“もう一つの試合”をつくることで、柔道ならではの力のせめぎあいを感じてもらいました。そんな経験上、言葉と対極の存在として繊維の可能性を感じていたので、STUDIO Cのプロジェクトは説得力がありましたね。



▲東京工業大学リベラルアーツ研究教育院准教授の伊藤亜紗さんは、視覚障がいを持つ方をはじめ、身体的条件が異なる人の世界の捉え方を研究。STUDIO Cのセッションに参加いただきました

東京でできないことを地方で実現する

司会：スタジオメンバーはXSTUDIOの取り組みをどのように感じましたか？

新山（STUDIO A）：今日発表したプロジェクトを今後実現へと進めていくには、覚悟が必要だと思いました。今、福井県鯖江にある事務所に店舗と観光案内所と漆器工房をつくっていますが、STUDIO Aの活動とリンクできないかと考えています。これまでの繊維産業に風穴を開けていけたら、産地にも自分たちにもプラスになりそうです。



▲デザイナーでTSUGI代表の新山さんは福井県鯖江市河和田地区で、デザインを通して地域とものづくりをつなげる活動を実践しています

萩原 (STUDIO B) : XSTUDIOは、仕事ではありません。この120日間、メンバーそれぞれがやってみたいことを棚卸して、プロジェクトを考えてきましたが、起点はあくまで自分たちの興味関心です。繊維と異分野との突拍子もないコラボレーションなど、個人的な関心はありますが、アパレル分野をはじめ、繊維に関心の近い人たちを巻き込むことも大事。今日のプレゼンテーションで、始めるより大変な、“継続すること”を考えるスイッチが入りました。



▲東京在住のWEBデザイナー萩原さん。XSCHOOLからXSTUDIOと、このプロジェクトに3年間伴走してくださっています

若林：もう東京で何かができなくなっていることの表れですね。地方はこういう人たちを取り込まないと（笑）。

白水：XSTUDIOは、思い入れと仕事の間の状態。都会の人が地方に通っているうちに仕事の比率が増えて抜けられなくなっていく、ミイラ取りがミイラになる状態が地方にとっていいのかも（笑）。

若林：観光にフォーカスしすぎるのはよくないですね。仕事のほうが強制力があり、嫌でもその場所に行かなければならない。今日ここに参加しているみなさんは、自分たちが何を地方に求めるのかを考えてみてはいかがでしょうか。東京では物事が大きすぎたり、時間がかかりすぎる。何かインパクトを起こそうと思っても、基本埋もれてしまうんです。そう考えると、地方の方が手応えを感じやすいのかもしれない。地方側の人もチャンスですよ。東京でできないことを地方でできると期待して来る人がいるわけだから。お金の準備は難しくても、チャンスやスピードなら用意できるとか。そういうことが大事じゃないかな。

萩原：今はいくらでも遠隔で打ち合わせができる時代ですが、福井でちゃんとプロジェクトを動かす人たちも必要だと思っています。東京にいる僕たちが毎週通い続けることはできないので、福井で仲間を募る必要があるのかもしれない。



▲萩原さんがリーダーを務めるSTUDIO Bでは、5つのプロジェクトが生まれました

若林：優秀な人たちがここまで福井に足を突っ込んでるのだから、福井の人たちはここに通う理由をしっかりと提供しないといけないですね。

新山：僕も大阪から福井に来てそのまま住んでしまう、まさにミイラ取りがミイラになったパターンです（笑）。過去2年のXSCHOOLがすごいのは、今でもその時のプロジェクトを動かしている人がいるということ。XSCHOOLやXSTUDIOに参加するような人材を地方側がどう生かすかが、大事だと思います。TSUGIでも、過去のXSCHOOLメンバーが働いてくれる予定です。

非合理的分野に、強みを見出す合理性

坂田（STUDIO C）：生粋の福井の人間は、ここでは実は私だけです。仕事があるのも大事ですが、感情の部分も大事。合理的に考えると、大都市の方が仕事がいっぱいあるのに、結局は理屈ではない情動がほとぼしって地方に来てるのかなと思います。そういう人が福井で新しい風を吹かせてくれる状態は大歓迎。逆に、そういう情熱ではなく、地方で何かやってやろうという人は、地域でハレーションを起こしてしまうと思うんです。

STUDIO Cのプロジェクトの進め方は、思考と行動が切り離される新鮮さを感じました。何かプロジェクトを起こす時に、普通なら先に情報を集めるとは思うんですが、STUDIO Cではいきなりつくる。しかも、脳みそで思い描いた通りにつくるのではなく、手を動かしながら出合っていくようなやり方で。さきほどSTUDIO Cのプロジェクトは「アートのだ」という例えがありましたが、同時に私は「資本主義的ではない」とも思っていました。これと交換可能なものが、まだ無いなと。



▲プランナーとして地域ブランディングを手がける坂田さん

白水：日本の繊維業界にも、「資本主義的ではない」部分があります。たとえば、日本でつくられる輸出用のカットソー素材には、マーケティング的にも左右されないような、すごく微妙な差にこだわってつくっている生地があります。海外では生産上、非効率だからあまり追求されない生地ですが、日本の職人さんは、こうした合理的でない部分をあえて強みにしている。このような方法は、今後STUDIO Cが意識すると良いと思いました。一見意味のなさそうなことから生まれてくるアプローチにこそ、都市ではできない強さがあるのかもしれない。

坂田：そうですね。値段がつけられないようなものを生み出してる気がします。言葉として伝わらなくても、その背景や感覚が伝わればいい。展示でも、もっとレースにさわって言葉を超えた何かを体感してほしいと思いました。

あらゆるものが「雑貨化」する危機感

若林：今考えた方がいいのは、あらゆるものが安易に「雑貨化」している問題。車や電車、建物であろうと、インスタ（instagram）におさまったら、全部雑貨になってしまう。本やレコードも、もはや雑貨的

なものとして流通している。雑貨化した物には、もはや「消費」というチャンネルしか残されていない。それは恐ろしい状況だなと思います。

地方の伝統文化や工芸にもそれが起こっています。東京のデザイナーが絡むと雑貨化するって構造、あるじゃないですか。デザインという論点が入ることにより、モノが一元化し、一緒の価値軸に並んでしまう。こういう安易な雑貨化と消費からどう外れるかを、まじめに考えないとといけない今、STUDIO Cはアンチ・デザインで、すごくラディカルなプロジェクトだなと思いました。



▲アンチ・デザイン的ともいえるアプローチでさまざまなモノを生み出したSTUDIO C

白水：都市の人たちの能力やアイデアは享受した方がいいと思いますが、バランスを取らないと、すぐに物事が雑貨化してしまう懸念があります。都市の人、地方の人が互いに利用しあう戦略が必要ですね。うなぎの寝床の主力商品である久留米紬の「もんぺ」は、別に「パンツ」って呼んでも問題はありません。でも、「もんぺ」という売り方にするだけで、文化や歴史も踏まえらる。現地の人たちが作り出すものを、調整して雑貨化させないのが、僕たちの大事な役割だと思っています。

すべてが可視化されつつある今、「無意識」の解放にヒントがある

伊藤：東京はすべてが可視化され、コントロールされていく感覚があります。リスクがないように、誰にでも説明できるようになっている部分が、逆に人を窮屈にしている。コントロールできない部分、つまりは無意識の部分にこそ、大事なことが隠れているような気がします。

たとえば、認知症の高齢者は、何かあっては危険！ と、“リスクの塊”のように感じている人が多いです。でもある地方で高齢者の施設に行った時、施設長さんが、うちでは玄関は施錠しないんです、と言っていました。入居者さんが、外に出て行ってしまう危険があるかもしれない。そのリスクを自覚しながらも、「生きるとはリスクがあることなんだ」と受け入れていたのが印象的でした。コントロールしすぎないということ自覚的に選択しつつ、リスク込みで生きていくというのは、人間らしく生きること。地方の「自覚的に無意識的な感覚」に、妄想的に期待したいです。



白水：それは面白い視点ですね。僕は佐賀や福岡や大分に住んできましたが、無意識的な人が多すぎて（笑）。都市から見た地方、地方から見た都市、そのイメージにはギャップがあるのかもしれません。

萩原：普段、私が専門としているウェブの仕事は、数字が求められる世界。なので、STUDIO Cの「ひたすら手を動かす」進め方は勇気が

あってすごいと思っていました。ものを作るには無意識やモヤモヤを感じる事が不可欠なはずなのに、こうすれば「いいね！」が増えるメソッド化が、あらゆる部分で進んでいます。メソッドからこぼれ落ちる部分に認知が働かなくなっている状態は、自覚しないといけません。

新山：今は地方でもすぐに均一化されてしまいがち。都会の動きは僕も気になるので意識してしまい、時々「東京っぽい口ゴつくっちゃったな」と思うことがあります（笑）。意識はするけど、均一化されない方法を考えることが大切。自分たちの勝ち方や生き方を増やしなが、地域のアイデンティティを醸成していかなければと思っています。

白水：やり方を決めずに議論することも大事。うちではゴールを決めずに議論し続けて、締め切りがきたら決める形をとっていますが、結果的にオリジナリティの高いアウトプットになると信じています。大変ですけどね。

数値化できない「ときめき」について考えてみる

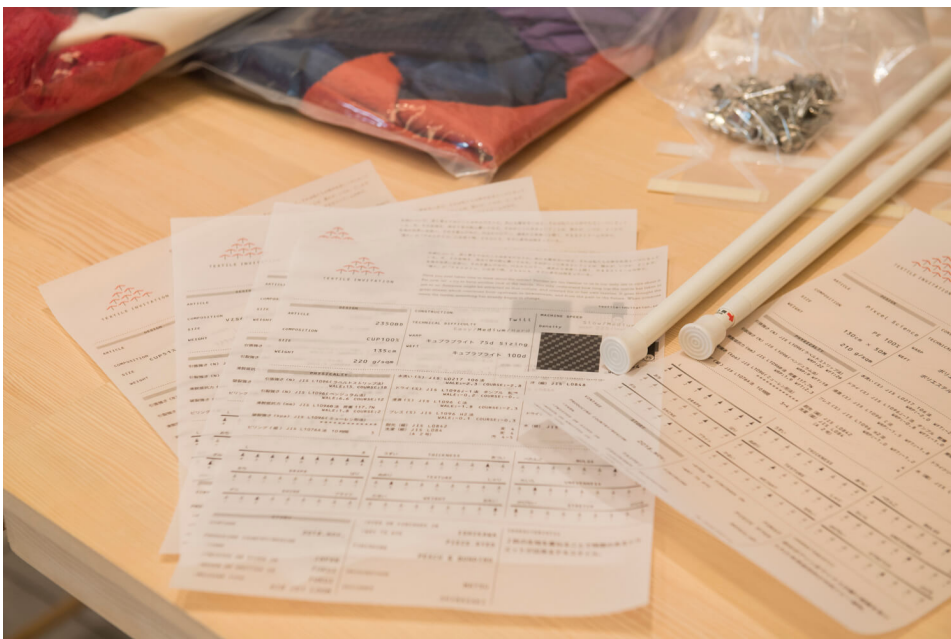
若林：例えば、最近アメリカで人気が高い整理整頓アドバイザーの『こんまり』（近藤麻理恵さん）。彼女は、家にあるモノは「ときめくものだけを残す」方法を取っていますが、それは納得できる考え方だと思っています。物を買うとき、人は頭のなかで複雑な情報処理をしています。それを数値化することは難しいから、今まで詳しく触れることがありませんでした。人による複雑な思考の解像度と市場経済的な部分は折り合うところがあるはず。単純に二項対立にせず、マーケットについてより理解を深めることが大事だと思います。

ここで、STUDIO Aリーダーの杉本雅明さんからこんな質問が飛び出しました。



▲STUDIO Aリーダーで起業家でもある杉本さん

杉本：STUDIO Aのプロジェクトで布を数値化したことにより、気づいた点がありました。「食べログ」は点数がお店に行く行動を起こさせますが、点数がついてないお店はその候補にも上らない。繊維に関しては僕がまさにその状態で、地図がなかったから、興味を持ってこなかったんです。何も数値的な指標がないところから、どうやって購買につながるのでしょうか。



▲STUDIO Aでは、布にまつわる風合いの数値化を試みました

若林：たとえば、値段の高いブランドの服を持っているけど、本当はあまり着心地がよくなかったりする。でも、高い金を払ったからとか、いろんなバイアスがかかってその服を「好きだと思いたい」ってことありませんか？ 気に入って買うとはどういうことなのか。自分自身に問いかけることで、購買に至る解像度を上げることはできると思うんですよね。

白水：今回面白かったのはSTUDIO AとCの対比。Aは理論から入ったプロジェクトだけど、最後は想いや感情の部分に落とし込んでいる。Cは感情と感覚から「よさ」を表現しているけど、ちゃんと社会に問いかけている。双方から行き来しながら物事をとらえる時代になってきたのかなと思いました。

司会：都市と地方、物事の雑貨化、感情、無意識……今回会場には、そこに問いかけようとする人たちが集まってくださっているのだと感じました。ありがとうございました！

（ラウンドトーク 終）



登壇者の話に会場全体が引き込まれたラウンドトーク。話題は尽きることなく、時間いっぱいまで白熱したトークが繰り広げられました。スタジオメンバーたちが得た気づきや発見は、2月9日に迫った福井でのプレゼンテーションで生かされることでしょう。

福井から何を生み出し、何を発信していくのか。XSTUDIOのこれからにつながる、大きなヒントに溢れた時間でした。

text：石原藍 photo：片岡杏子

いいね！ 0

<<< PREV NEXT >>>

Related article 関連記事



PROJECT XSTUDIO

人の流れと営みを、地域に息づかせる力とは XSTUDIO福井プレゼンテーション・エキシビジョン ～後編～

NICCA イノベーションセンターで行われた「XSTUDIOプレゼンテーション／福井」。前編では、繊維をテーマにした各スタジオの発表の様

[MORE >](#)

CONTACT



PROJECT XSTUDIO

人の流れと営みを、地域に息づかせる力とは XSTUDIO福井プレゼンテーション・エキシビション ～前編～

2019年2月9日、「XSTUDIOプレゼンテーション/福井」がNICCA イノベーションセンターで開催されました。会場には、関係者を含め300

[MORE >](#)



PROJECT XSTUDIO

速報！ XSTUDIO東京プレゼンテーション イベントレポート

2019年1月27日（日）、「東京ミッドタウン日比谷 BASEQ」にてXSTUDIO 東京プレゼンテーションが開催されました。メンバーや関係者を含めてなんと200人以上…

[MORE >](#)



PROJECT XSTUDIO

発表会まであと少し！ それぞれが作りたい繊維の未来とは？ ～最終ワークショップ～

2018年9月から始まったXSTUDIOも早いもので、12月の最終ワークショップを迎えました。3つのスタジオは「繊維」というフィールドで、それぞれまったく異なる方向を見…

[MORE >](#)



PROJECT XSTUDIO

あのプロジェクトは今……！？ 1期生・2期生が歩み続ける道のりを紹介！ ～XSCHOOL/XSTUDIOオープントーク～

XSTUDIO第2回ワークショップ1日目の夜には、XSCHOOL1期・2期の受講生、そしてXSTUDIOメンバーによるオープントークイベントが

[MORE >](#)



PROJECT XSTUDIO

東京1月27日（日）、福井2月9日（土）、プレゼンテーション・展示が開催決定！

福井の文化や風土を紐解き、社会の動きを洞察しながら、全国から集まる多分野のメンバーと地元企業が、新たな価値や事業の種となるプロジェクトをともにつくるXSTUDIO。福井…

[MORE >](#)



PROJECT XSTUDIO

リサーチと実験から見つけた繊維の新たな可能性
～第2・3回ワークショップ～

「繊維」をテーマに3つのスタジオが新たなプロジェクトを生み出すXSTUDIO。第1回ワークショップでは、パートナー企業の事業内容や強みを理解するところからスタートし、そ…

[MORE >](#)



PROJECT XSTUDIO

繊維をテーマにともに考えるXSTUDIOがスタート！ ～第1回ワークショップ・後編～

9月23～24日に行われたXSTUDIO第1回ワークショップ。前編では、福井の文化や風土、繊維業界のこれまでを紐解くさまざまなセッションの様子をご紹介します。後編は各…

[MORE >](#)



PROJECT XSTUDIO

繊維をテーマにともに考えるXSTUDIOがスタート！ ～第1回ワークショップ・前編～

福井を舞台に、新たなプロジェクトを生み出すXSTUDIOがついにはじまりました。昨年までのXSCHOOLは受講生が3人1組で進行しましたが、今年度はスタジオ形式で展開。…

[MORE >](#)

さらに読み込む



事業名 福井とつながる対流拡大事業 主宰 福井市
協力

© 2025 未来につなぐ ふくい魅える化プロジェクト

国立大学法人 福井大学 産学官連携本部、公立大学法人 福井県立大学 地域連携本部、株
式会社福井銀行、株式会社福井新聞社
運営 株式会社福井新聞社、株式会社デザインスタジオ・ピネン

CONTACT